リレーコラム 29

キャリアの積み方―私の場合

ベトナムで考えたこと

長崎大学熱帯医学研究所

小児感染症学分野

樋泉道子

私は今、長崎大学の熱帯医学研究所でベトナムでの臨床疫学研究に携わっています。研究者としては積み始めたばかりのキャリアですが、そこに至るまでの歩み―私の場合をご披露したいと思います。

私は卒後、熊本大学小児科に入局、熊本・宮崎県下の関連病院で勤務してきました。当時は目の前の患者さんへ対応することで精一杯、何とか一人前の小児科医になれればともがいていましたが、具体的なキャリアプランを持っていたわけではありませんでした。そんな臨床 8 年目、ふと、日本よりリソースの限られたところで小児医療はどうなっているのだろうということが気になり始め、調べるうちに小児国際保健分野に貢献することができないだろうかという希望に変わっていきました。一念発起した私は長崎大学の熱帯医学修士課程に入学しました。

熱帯医学修士課程では熱帯の感染症、公衆衛生、統計・疫学などを幅広く学び、初めて研究というものに触れることになります。私の時はクラスメイトの 3 分の 2 が熱帯諸国、主にアフリカから来た医師らで、その積極的な姿勢と性格に驚きながら共に学び、各国のお国事情を披露しあったことが私の熱帯医学入門でした。研究をもっとやってみたくなった私はその後できたばかりの教室、小児感染症学分野の最初の博士課程学生の一人となり、一昨年博士課程を修了、今は同教室の研究者となりました。

ベトナム中南部のニャチャンという海辺の街に、長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点の研究フィールドの一つがあります。長崎大学は 2006 年から同地で住民ベースの臨床疫学研究を行っているのですが、私は修士課程在学中に短期間の研修で訪れたことをきっかけにニャチャンでの研究を始めました。そこでは、小児の急性呼吸器感染症入院例を対象とし病原ウイルスや増悪リスク因子を調査するいわゆる「小児感染症学」から、研修中に遭遇した多くの先天性風疹症候群の小児を追跡調査した心疾患、感覚器障害、発達の研究、出生コホートを用いたアレルギー疾患の研究、肺炎球菌ワクチンスケジュールを評価するトライアルなど、広く小児の健康をトピックとした活動をおこなっています。ベトナムという発展目覚ましい発展途上国での問題を明らかにする研究ではありますが、その問題はほとんどすべてのこどもたちの問題でもあります。

その中で私はベトナム、日本、その他の国の様々なバックグラウンドを持った医師、研究者、スタッフらに出会い、国の違いや、臨床、研究、政策などアプローチの違いはあれども、医の目指すところはこどもたち、人々の健康と幸せなのだなと改めて思いました。研究者として早くはないスタートを切った私ですが、私の研究は、臨床で得た経験に、こどもたち、家族がどのように困っているのか、何のためにこの研究をやっているのかという根源的なところから支えられていると感じます。今はこの研究活動を通じて、こどもたちの健康と幸せにつながる道づくりの一端を担えたらと思っています。

【経　歴】

樋泉道子（といずみみちこ）

2003 年　熊本大学医学部卒業　同年熊本大学小児科に入局

その後熊本大学医学部附属病院、熊本市民病院、国立病院機構都城病院、熊本赤十字病院、水俣市立総合医療センターの 小児科で勤務

2011～2012 年　長崎大学熱帯医学修士課程

2012～2015 年　長崎大学医歯薬学総合研究科博士課程　（小児感染症学分野）

2013 年　1 年間休学し産学官連携研究員として ベトナム・ニャチャンに駐在

2015 年～　長崎大学熱帯医学研究所小児感染症学分野助教

男女共同参画推進委員会より

内閣府の男女共同参画局が平成30年に発表したデータによると、本邦における研究者に占める女性の割合は緩徐に上昇傾向にあるものの、平成29年３月31日現在で15.7%にとどまっています。お隣韓国では19.7%、米国では33.3%、英国では38.6%で、最も高いアイスランドでは47.2%とほぼ男性と同様の割合となっており、諸外国と比べて明らかに低いことがわかります。専門分野別―人文科学・社会科学・理学・工学・農学・医学/歯学・薬学/看護学・その他（心理学など）―で比べると、医学/歯学の分野は26.7%が女性で、最も低い工学（10.6%）と最も高い薬学/看護学（52.1%）のほぼ中間となっています。

研究というと、高度な手法を用いた基礎実験研究や、倫理的・経済的な制約のある臨床試験（介入研究）を思いうかべがちですが、臨床研究の1つである観察研究のテーマは、日常診療に潜んでいます。臨床研究の出発点となるクリニカル・クエスチョンは、医師免許を取得し、ある程度臨床経験を積んだ後に初めて湧いてくるもの（康永秀生週間医学界新聞第3232号2017年７月17日）と思えば、男性や女性に限らず、私たち1 人 1人みな、研究の機会はあるといえるのだと思います。